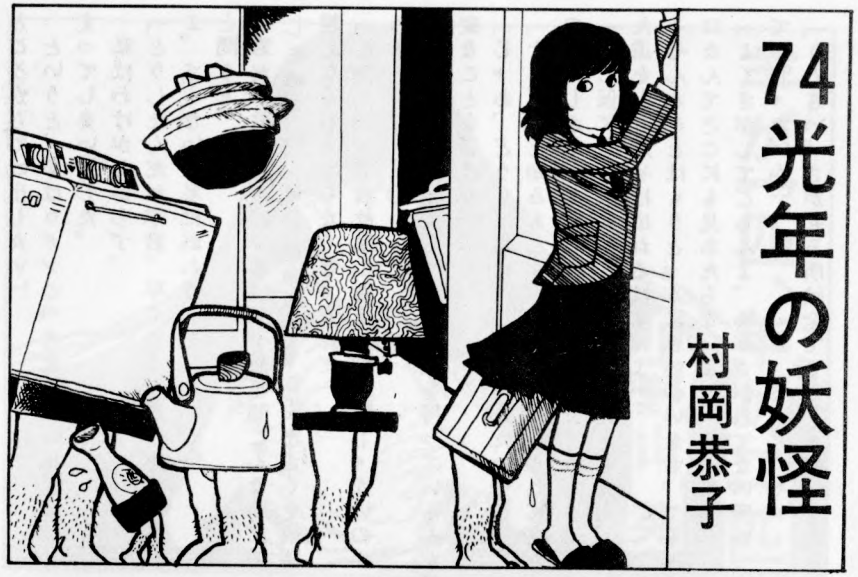
74光年の妖怪

村岡恭子



眠い。今朝もじつに眠い。昨晩おそくまで深夜放送を聴いていたせいか、脳みそが眠りこけている。母親にたたき起こされ、朝飯を大急ぎでつめ込んで、学校へと向かっているのだが、まぶたがくっついてきて、まともに歩けない。それでもなんとかふらふらと路上をさまよっていると、突然変なものが視界をよぎった。

「うぐ！」

と唸って、僕は立ち止まった。

そいつは、ポリバケツだった。いや、正確に言えば、足の生えたポリバケツが目の前を走りぬけて行ったのだ。

一瞬僕は頭がおかしくなったのかと思った。しかし、これは夢なんだと思うと、馬鹿馬鹿しくなってしまった。我ながら、変な夢をみるもんだ。

学校へ着くと、悪友のシブヤが便秘をしているようなさえない顔で椅子にすわっていた。

「よお、シブヤどうした、元気ないな」

と声をかけると、彼はがばっとふり向いて、

「大変だ、俺の頭がおかしくなったのだ」

とわめいた。

「なんだそんな事か、心配するな。元々おかしいんだから」

となぐさめたのだが、彼は興奮して

「ちがうちがう、幻覚が見えるのだ」

とわめく。何を見たのかと尋ねると、

「ポリバケツが足を生やして駆けまわっているんだ」

と泣き出さんばかり。

「えっ、じゃああれは本当だったのか！」

驚くのは僕の方だった。夢だとばかり思っていたのだが。

実は僕もそれを見たのだと言うと、シブヤは、

「うわあ、おまえと同じものを見るなんて、俺の頭もおしまいだあ」

と叫んだ。あわて者め。

それから授業が始まったのだが、僕はいつものように先生の言葉を聞き流しながらぼんやりしていた。すると、隣の席のシブヤが僕をつついて、

「おい、窓の外」

とささやいた。

そっちを向くと、な、なんと、サッカーボールが居るのだ。それもスネ毛をむき出しにした足が生えたやつが！僕たちは息をつめてそいつを観察していた。見ているうちに、どこからか野良犬がやって来て、そいつも不思議に思ったのか、足のはえたサッカーボールに恐る恐る近づき、においを嗅ぎだした。ボールはしばらくじっとしていたが、突然その足で犬の鼻先を蹴っとばした。犬は驚いて飛び上がり、ギャアギャアわめきながら向こうへ駆けて行った。

「あはは、逃げよった」

僕たちが笑っていると、背後に人の気配。ふり向くと教師が顔をひきつらせて仁王立ちになっていた。

「おいシブヤ、これはひょっとしたら大変なことかもしれないぞ」

廊下に仲良く並びながら、僕は言った。

「うん、俺もそう思う。これは人間の思考の限界を超えてるよ」

「誰かに相談した方がいいかな」

「でもなあ、大人は本気にしないだろうな」

そのとき思いついたのが、おじさんの事だ。

「大丈夫だ。僕のおじさんなら聞いてくれるよ。ひょっとしたら真相がわかるかもしれない」

というわけで、帰りにおじさんのアパートへ行くことにした。おじさんといってもまだ三十そこそこで、独身なのである。売れないイラストレーターをやっていて、SFとマンガばかり読んでいる。これでは嫁さんも来ないはずだ。

ドアをノックすると、髪をくしゃくしゃにした男が出てきた。

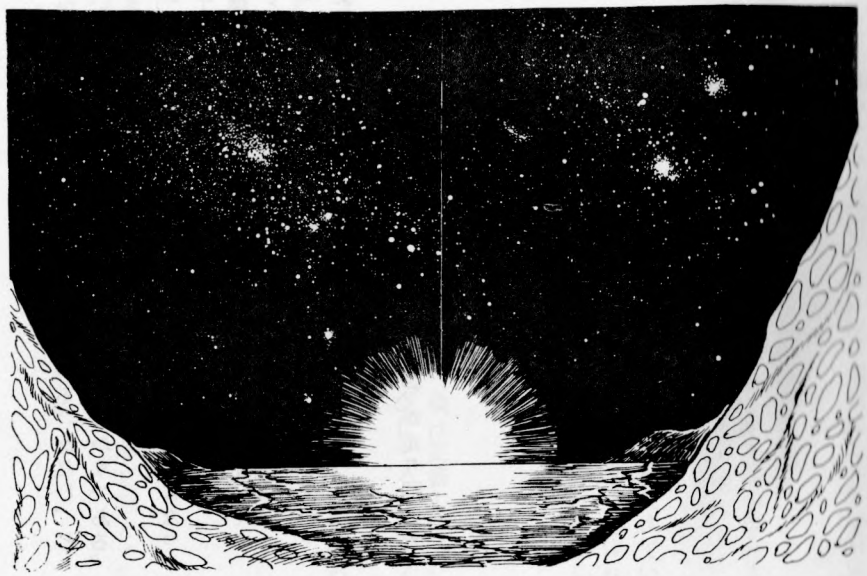
「やあ、よく来たな」

歓迎してくれるのはいいのだけれど、おじさんのいれてくれるコーヒーの薄いこと。色つきのお湯とい

ったところ。そいつをすすりながら、おじさんは真剣な顔で僕たちの話をきいていたが、
「うーん。SFでもそんなグロテスクな奴は出てこないなあ」
とのたもうた。僕たちは少なからずがっかりした。おじさんなら、真相をつきとめてくれると信じていたのに……。そのとき、ドアの外で何かをひっくり返すような音がした。
「!?」
ドアを開けると、そこに現われたものは……。ポリバケツだった。ひっくり返ったポリバケツの奴が足をばたばたさせているのだ。ふたがずれて、中から魚の頭やラーメンの端っこがこぼれている。唖然としている僕たちを尻目に、そいつは急いで起き上がり、逃げようとした。
「うぬ、逃がすか」
と叫ぶと、急いでおじさんはそいつの後を追った。ポリバケツが走る。それを追っておじさんが走る。
「おじさん、しっかり！」
僕たちは窓から身を乗り出して応援した。おじさんが走りながら手を振る……と見る間にぐんぐん差を縮めていった。僕たちの手に思わず力がはいる。あと一メートル、五十センチ、ついにおじさんをポリバケツを追い抜いて先頭に立った。

「おじさん、ちがうよ。競争じゃないよ」
そう言われて、おじさんははっとしたように立ち止まった。ふり向くと、そこにポリバケツが迫ってきた。
「開けてくれー、つかまえた」
との声にドアを開けると、しっかりポリバケツを抱きかかえたおじさんが立っていた。相当格闘したらしく、全身ゴミまみれだ。頭から残飯をかぶり、ものすごい臭いを発散させている。おじさんは鼻をつまんだまま、
「はやふ、こひつをとりほさへてくで」
と言った。
両足を縛りあげると、そいつは急におとなしくなった。僕たちは緊張した面持ちでそいつを観察した。しかし、見れば見るほど正視に耐えない形格好である。まさしく「足」なのだ。僕は今だかつて足というものがこれほどグロテスクだとは思わなかった。
そいつに恐る恐る触れていたおじさんが、
「ちょ、ちょっと見てみろ、こいつは生き物だぞ」
と声をあげた。見ると足の付け根のところが吸盤になっていて、ポリバケツにしっかりとくっついている。養分の摂取や排泄は足の裏で行なうらしい。
「足」は観念したらしく、じっとしている。
「こいつ、泣いてるんじゃないか？」

シブヤが言った。なるほど、表面がびっしょり濡れている。
「汗かいているんじゃないのかな」
てんでに勝手なことを言っていると、多勢の足音が聞こえてきた。僕たちは一瞬、恐怖を感じたが、逃げようと思ったときには遅かった。足の生えたゴミの集団が部屋になだれこんできたのだ。
「うわーっ、何だ何だ！」
ポリバケツ、穴のあいた鍋、破れたカサ、その他モロモロの廃品に足の生えたやつが部屋に押し入ってきたと思うと、あっという間にポリバケツをさらっていった。
僕たちは、履けるものを足にひっかけてそいつらの後を追った。見ると、おじさんは片足に下駄、片足にサンダルを履き、シブヤは革靴にワラジといった状態で疾走している。僕はといえばゴム長に鍋をひっかけて走っていた。
ゴミの集団は近くの児童公園に向かっていた。金網ごしに見える光景に、僕たちは慄然とした。そこには、無数のポリバケツ共が集まっていた。一見して、ゴミ、ゴミ、ゴミである。スネ毛をむき出しにした奴がうじゃうじゃしている。
「ううう……」
叫びそうになる口を必死で抑えて、僕はその光景を



見つめていた。
そのとき、頭上からぶよぶよぶよ～という怪音が降ってきた。見上げると、あっUFOだ、いや違うオカマだ。古典的純日本調炊飯器が空中を飛びかっていた。あ、あんまりだ。冗談にしてもひどすぎる、作者の手抜きだ……という感想は事件後のもので、そのときはあまりのバカバカしさに脳味曽が死に絶えていた。シブヤもおじさんもあんぐりと口を開け顔中の筋肉を弛緩させてつっ立っていた。
オカマはしばらくゴミ共の上空を旋回していたが、やがて中央部で止まると僕たちに呼びかけはじめた。
「え～太陽系第三惑星の皆様、こちらは銀河系運送組合連合会の宣伝釜でございます。手前共では短距離輸送には独自の方法を開発しております。今回に限りサービスを兼ねまして、試供品を置いてまいりますので、どうぞ御自由にお試しください。なお、御用命は最寄りの銀ウン連までご連絡のほどを」
それだけ下手くそな日本語で言うと、オカマは彼方へと飛び去っていた。
ふとゴミ共へ目を移すと、奴らはさっきまでおとなしくしていたのも束の間、てんで勝手に動きはじめていた。公園中を駆け廻り、池に落ちる奴もいれば、取っ組み合い、いや足組み合いのけんかをしているのもいる。かと思えば、ぬぬぬ……足と足とをからませて何やらやっているのもいる。ただし、どいつもたくましいスネ毛むき出しの足ばかりである。さすがに僕たちも頭がくらくらしてきた。
「お、おい帰ろう。こんな所にいたら脳捻転になってしまう」
僕たちはおじさんのアパートへと駆け戻った。そのとき、シブヤがぼそっと呟いた。
「あの宇宙人め、使い方の説明を忘れて行きやがった」
それから当分の間、町中をゴミたちが走り回った。

正義の味方さんがいました。名前はミル＝サンダー。
〝宇宙の平和を乱すやつは僕が許さない！〟
なんてがんばっていましたけど、かんじんの許さない相手がいないのです。
〝僕、強いんだけどなぁ。〟
なんて言いながら長く苦しいはずの旅を続けていると……あ！いましたいました。怪獣が湖であばれています。ミルはものすごい速さで飛んで行きました。びゅううん
〝宇宙の平和を……〟
〝きゃあ　チカン！〟
〝チ、チカンだなんてひどいや。僕は正義の……〟
〝チカンじゃないの！ヒトが水浴びしてる所のぞくなんて〟
〝水浴び？あ、あの、あばれてたんじゃ……ないの？〟
〝まー失礼しちゃう。なにさ子供のくせに〟
〝ご、ごめんなさい……。〟
よく見ると、その星は怪獣しかいないのです。
〝はあ！びっくりした〟
しょうがないから、そこをはなれて少し飛んでいると……。
あっこんどは絶対だ。びゅううん

〝こら！宇宙の平和を乱す悪い子め！弱いものいじめしちゃダメじゃないか〟

いじめっ子は木の棒を持ってたちむかってきましたが、しょせん正義の味方ミル＝サンダーの敵ではありません。ものの三十分もしないうちに泣きながら逃げていきました。

〝ありがとう！おにいちゃん強いんだね♥〟

〝うん。宇宙の平和を守るためには強くなくちゃね。キミもいつまでも弱い子じゃダメだよ。〟

〝うん！僕も強くなるよ。おにいちゃんみたいに。〟

その子と約束してから、また飛び立って行ったのですけれど、そんなに事件って続いておこってくれるものではないし、その日はもうやめて眠ることにしました。宇宙の中ですから毛布もマクラもいりません。浮かんだまま目を閉じるだけです。おやすみなさーい♡

朝が来ました。宇宙の朝はニワトリも鳴きません。お日さまだって昇りません。さみしい朝です。でも、ミルはそんなこと気にしないで元気いっぱいにおきあがりました。

なんかないかなぁって思いながら飛んでいると、どこかの太陽が泣いていました。

〝どうしたの？〟

〝この先にブラックホールという何でも食べてしまう怪獣がいるのです。きのう、私の衛星がひとりのこらず食べられてしまって……〟

〝そうだったのか。〟

ミルの血はおどりました。初めての大きな敵です。さあ行くぞ。宇宙の平和をみだす悪者め！♪びゅうう♬

〝やい怪獣！悪いことするやつは僕が許さんぞ！〟

ブラックホールは返事もしないでいきなりミルにおそいかかってきましたが。がおー♡

ミルはかみつこうとするブラックホールの頭を右によけ左にかわして飛び回りました。

最後には怪獣の首がもつれてからまって、ブラックホールは泣き出してしまいました。これぞミルの得意わざ。かくらん戦法！（今発明したばかりなんですけど）

〝どうして悪いことばかりするんだ。〟

〝だ、だって、僕、いくら食べても食べてもおなかがすいちゃうんです。〟

ミルはブラックホールの体の中をしらべてみました。なんと胃袋に異次元への入口があったのです。ミルはその入口をふさいであげました。そして、

〝もう悪いことしちゃダメだぞ。〟

と言って飛び立ってゆきました。

そして、今日も宇宙は平和なのです。

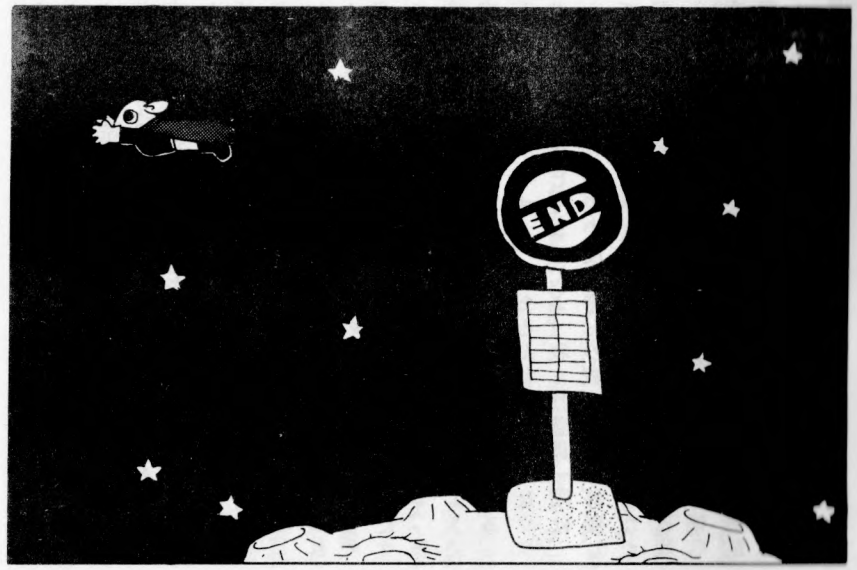
おまけ

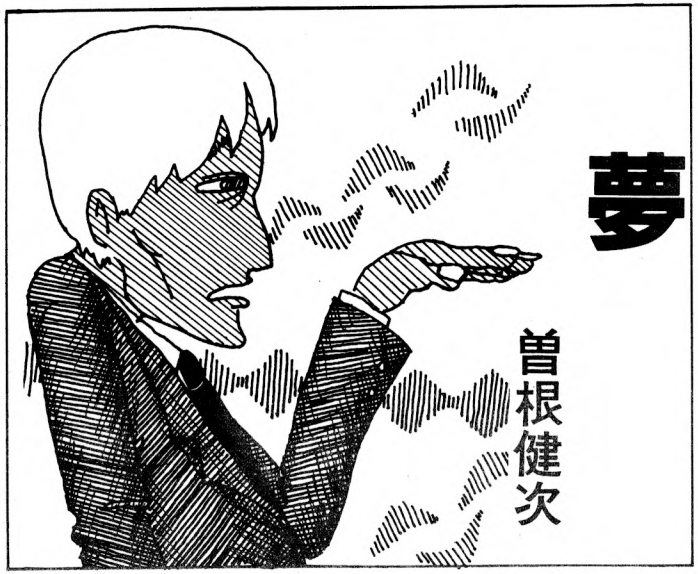
ミルはたいくつでした。ここ一ケ月ばかり何の事件もないのです。ほかのスーパーヒーローたちはちゃあんと敵を用意してもらってるのにどうして僕だけ誰もいないんだろう。まったく不公平です。あーいやんなっちゃう。僕、とっても強いんだけどなぁ。重力波だって出せるんだぞ！それに、それに、原素破壊光線だってマシンガンだって。そいから時空間分離カッターだって、反重力場だって作れるんだけど……。

気がつくと、島宇宙がひとつ消えちゃっていました。

〝あーあ、またやっちゃった！〟

ほんとにまったくもう実になんとも冗談じゃない！正義の味方ミル＝サンダーは、宇宙の平和を守るため、今日もまた宿命の敵のたいくつと戦っているのです。かっこよくないなあ♨





「これは、これはようこそ。道中いかがでしたか。チカビリ記念堂にはいかれましたか。いや、まだですか。でしたらぜひ一度いってみなさい。あそこには銀河系全惑星の過去一億年にわたる歴史が……。

え、用件？あっ、そうでしたな、これは私としたことが。なあにネェ。この前女房にも言われたんですよ。近頃物忘れがひどくなったって。年なんですかね。用件？そうでしたな。エート、何でした？いや忘れたわけじゃないんですよ。いやチョットネ。わかるでしょ。ド忘れというやつですよ。のどもとまでは出かかっているんですがネ。エート何でしたかね。カメイ？あっ、そうでしたな、加盟でしたな。いや我々としてもあなたがたのように勇気にあふれた方々が仲間に入ってくれるのは頼もしいかぎりです。イヤ、何もあなたがたが、野蛮で血にうえたケモノである、と言ったんじゃないんです。エエ、評議員の中には、そんな事を言ってる人もいるようですが。誰かって？いや、私はそんなウワサがある、と言ってるまでですよ。もちろん私は、そんなウワサをまったく信じてませんよ。我々評議員一同は、あなたがたの辺境での侵略者との戦いを高く評価してますよ。イヤ、何も戦争することだけが、あなたがたの能力だと言ってるんじゃないんです。現に我々はあなたがたにも布教活動を……。え？よく判らないって。つまりですな、文明の遅れた星に宗教的指導者を送り込んでですな、宗教的共同体を形成して、住民を健全な方へ導こうというわけです。他の星の進化に手を加えてもいいのかって？いや何も我

我は、自分達に都合の良いように進化の方向をねじまげるわけではなく、あくまでも、銀河社会全体に有用な方向に向くように、手を貸すだけです。そのいい例があなたがたですよ。我々は三千年前に、あなたの星の、北半球の大陸に宣教師を派遣したんですよ。えーと、名前。そうそう、イエスでしたかね。あ、急にどうしたんですか。やめなさい。レーザーガンなんか持ってどうするつもりですか。いや、お互い話せばわかる。ア、コラ、ヤメロ、バカ、ユルシテクダサイ。タスケテオカアチャン。――バカメ。非常ベルを押したのも気がつかなかったのか。テメーのような二本足のバケモノは、黒こげになった方が良いんだ。コラ衛兵、おそいぞ。何してたんだ。それにこんな野蛮人に武器を持たしたまま俺に会わせるとは何事か。もう一度こんなことがあれば、軍法会議にかけるぞ、いいか。それからこの死体をはこんでいってくれ。見てるだけで胸が悪くなる。本当にこの野蛮人には手をやかされる。精神が発達してないのにこんなオモチャばかり、りっぱなものをもってるんだからな。あそこの星におりたイエスの野郎さえまじめに仕事をしてればこんなことにならなかったんだ。もう少しうまくやってれば、今ごろ奴らは剣をふりまわしてあそんでいたのに。このことは今度の評議会で審議するとして、やはり布教局の長官は奴ではだめだな。やっぱりタナカにするか。それから国防長官に地球を破壊するように命令しなくちゃ。そうそうもう少しで忘れてしまうところだった。今日は妻との結婚記念日だったな。帰りにはバラをかって帰らないと。忘れたらまたカミナリだからなあ。おッ、たいへんだ。もう五時か。はやくいかないと花屋がしまる。チェおくれたら地球のバケモノのせいだ。アイツラ人間はいちばんひどい方法で殺してやるから思いしれよ」 男はそう言ってニタニタ笑った。

「先生、あの、うちの息子は大丈夫でしょうか？近頃こんな事ばかり言っているんですけど」 その男の母親らしい四十五才くらいの女は、すがるような目つきで、医者にたずねた。

「だめです。回復の見込ゼロ、絶望、絶命、絶滅、絶糞。アキラメなさい。また新しいのをつくるんですな。このような、SF的誇大妄想分裂症的癲癇併発精神薄弱を直すことは、不可能です。たとえ草津の湯であっても無理だす。アキラメなさい。ザンネンでした。またのおこしを」 医者は沈痛なおもも ちで語った。

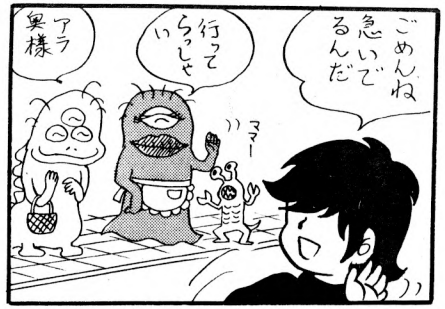
「それじゃ、この子は家に帰ってソーセージにでもします」母親の顔には、久しぶりに明るい表情が浮かんでいた。

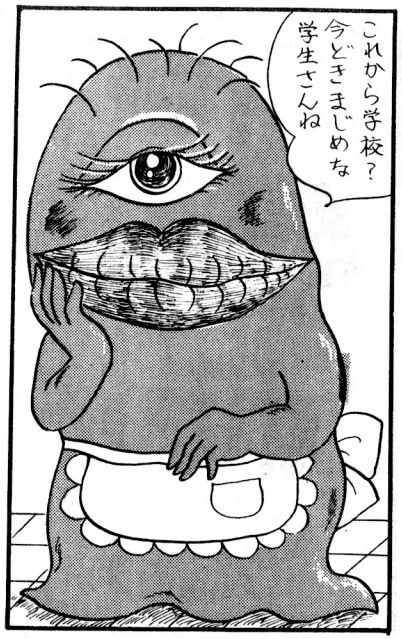
N・H氏の奇妙な生活

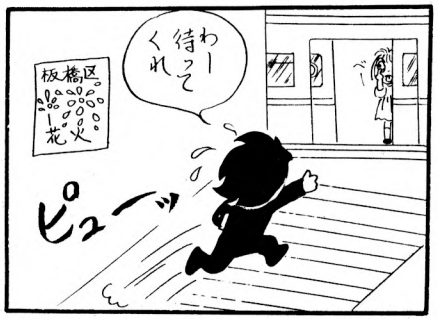
その朝もN・H君は感心にも学校へ行くために駅へと向かっていた

るんるん F・ライバーは最高だぜ

描いたん ゲイリー・ニューマン じゃなくて MURAOKA KYOKO





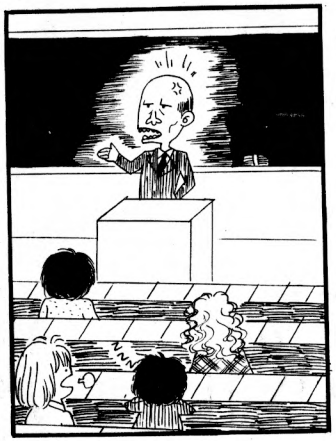


待ってくれよ友だちがいのない奴だな
アハハ実は足の方は50メートルほど後ろを歩いてる
だってオマエを待ってたら日が暮れちゃうよ
どたどた

スタッ
なんだヒロミちゃんか

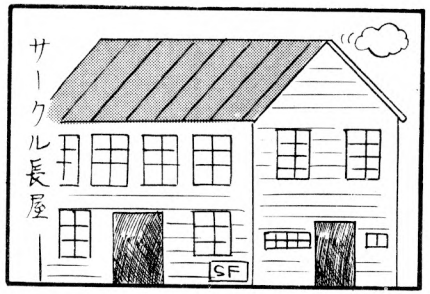
おはようヒサオ君
わっ
バサバサッ

今日はクラブの例会よ
ウン



ぼーっ

ガバッ


サークル長屋
SF

我がSF研の部室は女子トイレを改造してつくったという
こんちはー

ブキ
ブキミ
ブキミ
ブキ
ブキ

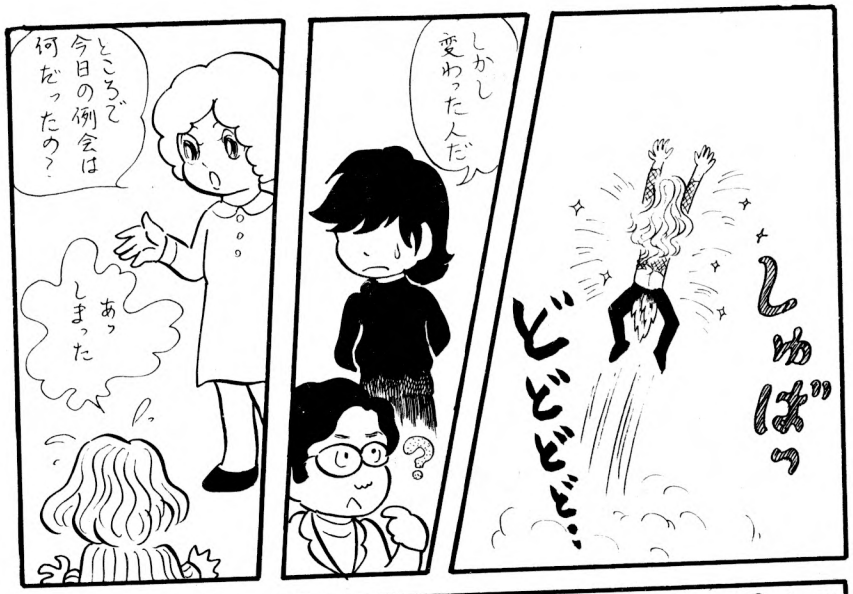
れれどうしたのみんな?
ブキ〜〜

しーっ今部長が瞑想状態にはいってんのよ
あ、ホント
ひそっ

あっ次元のカベが…
ピピッ

何か出るぞ！
コロッ
コロコロ…
ブタばっかり出してどうするんだよ
オッちがうもんが出るぞ
ヒュッ
ギャー
こんなもん出すちょ
ヒー
ボーッ
じりじり

ゴーッ
わーっ エライ ヒロミちゃん
わーい 勝った 勝った
ひーん ひーん
ポッ
ぼくらは何をやってるんだろう？
ぱっ
あれ？ 部長どこ行くのー
家に帰るのよ
バイバイ


しゅばぁ
どどどど…
しかし変わった人だ
ところで今日の例会は何だったの？
あっしまった

じつは今度の同人誌の原稿なんだけど…
えーっ集まってない？
どーするんだヨオ
無能編集長

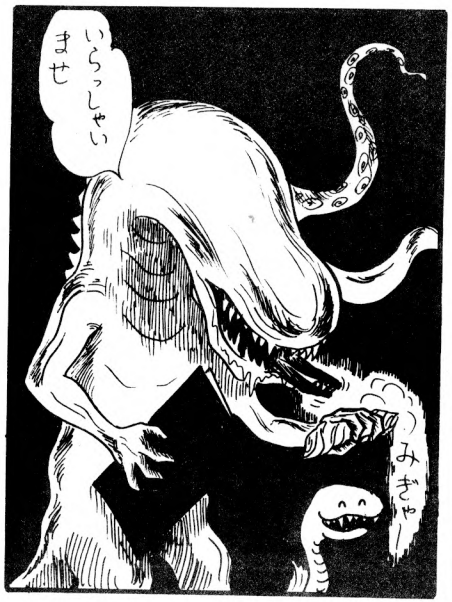
ぼくはアルマジロだあ
しゅるしゅる

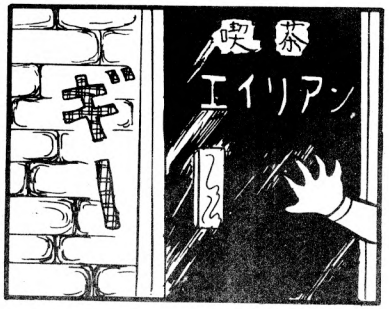
ウッウッそんなにいじめないでくれー
バカ
アホ
死んでしまえ
生きてる価値ねえぞ

コロン
コロン
あらら行っちゃったよ

でどーする
けっこう何とかなるんじゃない？

とにかくサ店行こうぜ


いらっしゃいませ
みぎゃー


喫茶
エイリアン
しゅる

— おしゃまい —

私的ファンタジー考

清水克純

日本に於て最近漸く『ファンタジー』という言葉が多少なりとも普遍的になり、ある程度の市民権を享受しうるように成って来たが、その語感はまだ日本の読者にとって、多分に曖昧さを残している。これは、日本に於けるファンタジーの発展を追跡してみれば良く理解されるであろうが、そうは言っても、現在のように『ファンタジー』が一分野として認識されるに到ったのは十分に喜ばしい。しかし、この事が一般にどう受容されているか、特にファンタジーファンとの多くの重複者を抱えているだろうSFファンがどう受け止めているかを推察すると、少々戸惑いが沸き上がらずにはおれない。それは、彼らがファンタジーを想う時にまず頭に浮かぶのは『指輪物語』であり、今日アメリカで急激に盛んになってきたファンタジー小説の類だろうからだ。このようなファンタジーの一部の可能性にしか過ぎない『指輪物語』に代表されるような物語が、直様ファンタジーの代表例と見做される傾向が私には容認し得ない。

それは、戦後日本でファンタジーという目新しい単語が定着していず、ファンタジーそのものさえ、一般に理解されていなかった時から綿々と、それらしき小説が出版され、訳出されてきた情況。そしてそれぞれが強固に、固有に持ち合わせていた形態、

様式など無視されながらも、その多種多様に渡った作品群が、ファンタジーと総称されるようになってきた過程を考察する時、明らかにSF的傾向を牢固に内包している現代アメリカファンタジーと一線を画する日本に於てファンタジーとして一括されてきたそれら、フェアリー・テール、メルフェン、民話、神話、童話、恐怖小説、怪奇小説等々の事を、どうしても考慮してしまうからである。だから、現在のこの活況を嬉しく思う反面、違うんだと叫びたい衝動が湧上がってくる。

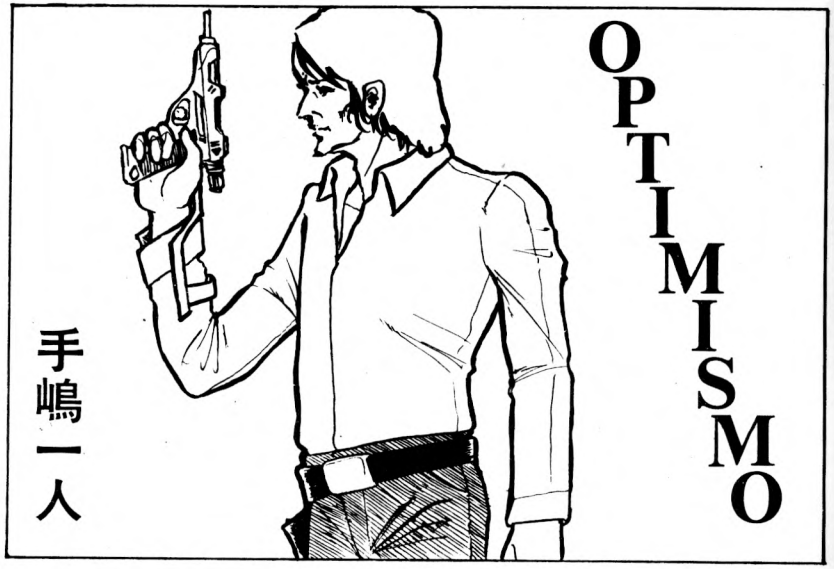
なにも、昔のゴッタ煮の状態のままの方が良かったと主張するつもりは毛頭ないが、私自身は、それら全部が、それぞれファンタジーとしての一要素であり、一分子であるとの観念を懐いているので、そのうちの一部分だけが突出している現在の状況、そしてその突部分を指して、それこそが唯一無二の本来のファンタジーであるかのような捉え方が認せないだけである。

この『ファンタジー』として捉えるべき許容範囲、境界線という課題は、非常に困難な問題であり、ある程度の主観が這入り込まざるを得ないし、それゆえに各人での異同があっても然るべきだろう。これは各々の感覚（感性）の違いであり、もし君がSFファンであれば、銘々でSF感が微妙にずれているとの経験を保持しているに相違なく、これと似かよった現象と見做せるはずで、その観念が個人個人で異なるのは致しかたない。特に日本のように特殊な有様、様々なものがファンタジーとして総括されるのではなしに、何か漠然としたものとして出現する状態が長期に渡って続いた傾向を想起するならば、よけいにその曖昧さは助長され得る。だからこそ、私個人としては、ファンタジーを狭隘に考えずに、もっと広範囲に解釈したい。だが、それゆえに、その分界が空漠としたものに成る可能性は少なくないが、確実な境、毅然とした境界など在り得ようはずがない。しかし、それでは『ファンタジー』という言葉の定義の否定にも繋がりかねず、『ファンタジー』として区分する意味、実際がなくなりかねない。それを克服するために、中心となるものを提起し、それで、ファンタジーとして全体を纏める核としたい。

その核心となるものを『不思議』とする。この不思議とは、生物、現象、雰囲気などありとあらゆる形式を含有し、その何れか一つの要素でもファンタジーとして事足り、この不思議な感じが強ければ強い程濃密なファンタジーとなる。また、当然反対にその不思議なムードが漂わないほど、ファンタジーとしての性質が削減される。

この提議を具体的に『指輪物語』に当嵌て実践して見る。ホビットという小人、ガンダルフという魔法使い、そしてエルフ族という妖精などが主要な登場人物としての役割をこなし、またその他様々な不思議な生き物が出現するので、当然ファンタジーと言える。しかし、この主要な不思議なる存在達は、小説を読み進めて行くうちに、その不思議さが薄れてゆき、物語としての面白さ、興味が先行してゆくことに気がつく。ホビットは、人間を小さくしただけの唯の人間であり、エルフ達は妖精の衣を被った人間に成り果て、ガンダルフは徒の魔法使いになってしまう。そして、『中つ国』というこのロマンの設定世界そのものから不思議なる印象が流伝してこないために、トム・ボンバディルやエント族のように興味つきない他の不思議なる存在が有りながら、良く出来た小説の感覚が堅固になり、やはり『指輪物語』はファンタジーではあるが、その中心に位置する理由にはいかず、その一支流となる。

誤解のないよう表現し直すと、ファンタジーの手法を借りて表現することによって、物語としての面白さを増加させ、また現実と全く掛け離れた世界を構築するSF的手段を導入する事により、長編小説（大河小説）としてファンタジーを生かす可能性を生んだ。このように、非常に高い方向性を示唆する一支流となるが、やはり、ファンタジーの一つの可能性に過ぎず、中心とは成り得ない。では、ファンタジー全体の核となるものは何か——と、なると、それは表現方法そのものから不思議なる感じが漂って来、その存在自体がより濃厚なファンタスティックなムードに誘われる作品であろう。当然それは、より短い表現形式による方が有利にならざるを得ないだろうし、ストーリーを無意味とする傾向を引き起すだろうが。



OPTIMISMO

手嶋一人

世界は一瞬の間に崩壊した。

私は、自治局に勤めていたおかげで、何処かに、こういった世界の出現を考慮して、残された人々を救い、文明の再建を図る為のセンターが建設されつつあるということを耳にしていた。しかし、それに関する資料は他のガラクタと共に崩壊後の暴動によって完全に失われてしまった。その失われたものを手に入れるには、時折吹く気紛れな風にメイルオーダーするぐらいの方法しかないだろう。それに、もし、所在地が分ったとしても、それが完成していたのかどうか。或いは、そこは、今、かって所在したという意味しか持っていないのかもしれない。

私の住む都市は、地上部分が完全に消滅し、私の立っている地下二階の倉庫から碧空が見える。破壊の反動はもう収まり、崩れるべきものは崩れ、壊れるべきものは、全て壊れてしまった。汚染された大地は、それを覆う特殊フィルムを引き剝がされて、浄化され、酸素増出微生物を含んで緑化した暗い空は明るい紺碧に変った。

随分とさっぱりしてしまったものだ。唯私の身体の中に蓄積された汚物だけが平然としている。カドミウム、ニコチン、タール、スイギン、PCB、E

TC。序に、私の身体の中も、きれいさっぱりと浄化していって呉れれば良いものを。だが、あの時、他の諸々のものと共にあれに巻き込まれた人々は、身体をさっぱりとするどころか、存在をもさっぱりとしてしまった。きれいなものだ。何も無しで、何にも残らず。

地上を歩くと、かって私に覆い被さる様に林立した高層建築物群が地平線に代り、今、都市であったということは、地表を危険で醜いものとしている無数の半壊した地下都市層のクレバスが示している。時には、深く、地下五層までも達し、その底では、土が露出し、今まで陽に接したことのない部分が一日の内僅な時間、それを浴びる。時には、浅く、路面と地下第一層の天井だけが崩れ落ちたのみで、私にも飛び降りることが可能だ。これらの歪なクレバスや溝や干上がったプールが、今ここを誰かが仮に都市と呼ぶとするならば、都市を形成している全てである。そして、空から見れば、ギリシア神話の迷宮に見えるかもしれない。そして囚われた人々もいる。だがそれは、飽くまで破壊の跡であり、そこには、思考の片鱗さえも読みとることはできないだろう。我々の身の丈が今の五倍もあれば面白い場所だろうが、空気も澄んで気持ちが良いだろうが、唯、お弁当を持って来なくてはいけない。

今の地上は別天地とも言える。言えるということは言えないということ。清潔な空気にも、懐しい土の薫の中にも、生命の臭いが感じとれない。汚濁は消えても、その後、原始のように生命を限りなく供給してくれるひとはいない。それを行なうとすれば我々以外には。しかし、人々は暴動に驚くべき活力を消費した後、息を潜めている。皆さん、自分の持ち場を見つけてしまったようだ。

あの騒ぎもおかしなものだった。消滅した地上を混乱させることもできないので、群衆は都市の地下層を荒し回ったのだが。地階だって完全に残ってはいない。通路は分断され、荒し回るのも骨だったろう。私は都市跡の外れで寝そべっていたのだが。殺風景な眺めの中に、時々何人かの人間が、ひょっこりと顔を出して這い上がって来たかと思うと、暫く辺りを見回して、何か下に合図を送り、また別の処へ飛び降りていく。おかしいのは、その後だ。その後に、何十人だろうか、何百人だろうか、それは、その時によって区区なのだが、人々が続いて、同じ様にひょこひょこと出て来ては飛び降りる。それが、時には、同時に何箇所かで起きるのだ。人間の連なりが、入っては出て、入っては出る。そして次第に掠奪物を身に着けて脹らんでゆく。もっと遠くから眺めれば、愚かな肥った蛇が網の目に絡んでいる様

に見えただろう。

あれは、かつて起きた暴動の中でも、取分におかしいに違いない。あんなことが起きた後に、果たして、人類史上最大の偉業を行えるかどうか、大いなる疑問ではあるが、・・・しなくてはならない。

先ず、何よりも、地上に生命を取り戻すことが重要だ。その為にできることは・・・外部から隔離された養殖施設の中の生命を解放してやること。しかし、何世代もの間、人間に養われて来た生物が、その手を離れて生きてゆけるだろうか。否、それは我々の思い上がりに過ぎまい。我々の行って来たのは自然の模倣に過ぎないのだから。人間は彼等を閉じ込めて利用して来たが、根本的に存在を変革しはしなかった。人間は、食物として、その味とタンパク質を求めていただけだが、今も、魚達は水中に棲み、エラを持ち、ヒレを持ち、互に常時触れ合うような狭い空間で蠢く様に泳いでいる。彼等は放たれるのを待っていたのだ。

幸い、地下にある養殖施設の多くは地下都市の下層部に設置され、破壊されずに残っている。それ等を同時に開いてやれば、簡単な点で構成された食物連鎖が生まれるはずだ。だが、それ等の養殖施設は全て暴徒に占拠されている。彼等は、それによって生き延び、そこで産出されたものを他の集団との交換物質としている。歴史の繰り返し。これでは、たとえ、それによって次第に平安を取り戻し、人々が統合されてゆくにしても、それは、今消滅した文明を末期近くから再現するだけのことだ。暫くすれば復た消滅する。再構成・崩壊の短いサイクルが我々を弄ぶ。そうなれば、人類の文明の本質は一体どうなってしまうだろう。

「ねえ、何してんのよ。」

私の仲間の暴徒の一人がやって来た。

新しい文明を創り出さなければいけない。一体、どんな。

「ちょっとお。返事ぐらいしなさいよ。」

新しい文明。一体、どんなものになれば満足できるだろう。もし、地上に再び生命の活気を呼び戻すことが出来たなら。では、人間は次にどうすれば良いか。

「交代の時間よ。もう、みんな疲れて来ちゃったんだから。」

この馬鹿女め。文明の何たるかも知らずに。食うこととセックスぐらいにしか興味が無いんだろう。これから、一演説ぶってやろうか。

「なに、ぐずぐずしてるの。」

「分った。すぐ行くよ。」

バカ女め・・・。

暴徒の一員としての私は、地下に残された植物性プラントトンの培養池の発電機の一つを交代で回すのに加わることと、その地上との連絡口の一つである剝き出しの地下倉庫の天井のあった上を見上げていることを、その役目とされている。あの髭もじゃの男が私にそう言ったのだ。

「オイ、若いの。あそこ行って、上見ててくんな。」

だから私は、あそこ行って上を見ている。人が来たって、どうなるか知っちゃいない。唯、気分によっては。待て、手をゆっくり拡いて上げろ、じっとして動くな、などと怒鳴るかもしれない。時には、何の弾みか、引金を引いてしまう。後、上から落ちてくるものを片付けるのは、別の人間の仕事だ。私は常にここに立って見張っていなくてはならない。結局、引金を引こうが引くまいが、警告をしようがすまいが、私には無関係のことだった。唯、いつも、文明の行方だけが気になる。

「コメ。」

首が少々疲れて来た時、頭上から声が響いて来た。

「シラミ。」

私は、今迄続いた沈黙の為に緩んだ声帯を叩き起こして、地上二階の床から、地上まで聞こえる様に大声でそう答えた。声帯が抗議するかの様に母音を引き攣らせる。私は傍に寝かせてあった二つの梯子の一つを上の階の床面まで立て掛けると、もう一つを担いで上に登り、それを地上まで掛けた。掛けた梯子の上端を見上げると、私の首は音を発て、髭面が私を睨みつけていた。

「オイ、若いの。銃はどうした。」

兵隊じゃあるまいし、梯子と銃が同時に持てるとは思わない。

「この梯子は重いんでね。」

「じゃ、誰か呼んで来たらどうなんだ。」

銃を置いて仲間に梯子を掛けてやるのと、誰か呼びに行くのとどう違うのだろう。それなら、私独りに見張らせることはないと思うが。だが、彼は私独りにそう言った。

「じゃ、誰か呼んで来ましょうか。」

「もういい。」

彼は怒った様に言い。後に手で合図を送って、梯子の段を降りて来た。私も、それと同時に元立っていた階まで戻る。髭面の後には、数人の男達が続いた。最後の男が、銃のベルトを小さく締めて肩に上の梯子を担いだ。私は壁に凭れ、それを眺めていた。髭面も満足そうにそれを見ている。大したもんだ。

髭面は私の前に立って、覗き込む様に私の顔を見

てこう言った。私の方が随分背が高いのに。

「こんど、お前さんには、荷の護衛を頼む。鯨の養殖場へ持ってくやつだ。どうも、お前さんに、ここの見張りは向いてねえらしい。」

誰が、こんなことに向いているもんか。尤も、あの兵隊さんには適役ってとこかもしれない。

「お前さんが銃をちっとは使えるってことを無駄にはしないぜ。」

御遠慮無く。どんどん無駄にして結構。

「動くなよ。」

都市外れの小高い丘の墓地だった所に座って、都市の混乱の様を眺めていた私は、突然の声に、迂闊にも、置いてあった銃に手を伸ばしてしまった。次に私は、背中真中辺りに何か熱いものを感じて手を引っ込めた。

「くそ。こいつ、いかれやがった。」

しゃがれた声がぶつぶつ言っている。

「オイ、運のいい野郎だ。手を頭の後にあてて立て。」

私は、言われた通りにして立ちながら、彼が何処から現れたのかを考えていた。

「こっち向きな。ゆっくりとだぞ。」

私は極めてゆっくりと振り返った。そこには、髭面の男が、数人の男を引き連れて立っていた。手には豪勢な武器を握りしめている。私がそれに目を止めたのに気付くと、その男は地面にそれを放った。燃料が切れたのか、液晶反動体が焼けてしまったのだろう。強力だが、連続使用に耐えられず、役に立たない。熱線銃という旧式な名が哀れを誘う。私の背を襲ったエネルギーは、恐らく、皮膚表面でも五十度に達していなかった。

「ここで何してる。」

何が言いたいんだ。そいつは、こっちの訊きたいことだ。大体、察っしはついている。

「君こそ何なんだ。」

自分で言って、馬鹿げてると感じた。意味が大して無い。唯の切掛に過ぎないのだ。

「へっ。きみだとさ。卵の黄身か。こっちが先に訊いたんだ。」

「私は別に何もしてない。」

「そいつぁ、おかしいじゃねえか。他の連中は大騒ぎだってえのに、こんな処に落ち着き払って、何もしてねえって。お前、いい形してるな。何やってた。」

「自治局の厚生課に勤めてた。」

「戦争起こした連中の仲間ってわけか。」

「戦争が原因でこうなったと言うのか。」

「それしかあるめえ。」

「しかし、誰も戦ってはいなかった。我々は崩壊し